

## 明石の史跡（74）相博



暦応2年（1339＝延元4）9月27日、足利尊氏は、前右大臣の洞院公賢（とういんきんかた）にたいし、その所領である、平野荘（神戸市西区）と、3か所の荘園（摂津国西成郡榎並荘東方・同国楠葉河北荘年預名・備前国河田領家職）の相博（そうはく＝そうぼく）を求めている（「河東文書」『兵庫県史史料編中世1』153頁）。

相博とは「古代・中世、田地・所領などを交換すること」（広辞苑）であり、尊氏は、3対1のトレードをおこなったことになる。物理的にも、尊氏側にはマイナスとしかみえない。それほどまでに、平野荘（明石の中心街より4キロ北北西）にこだわった背景は、なんであったのか。

これより2カ月前の7月26日、丹生寺（神戸市北区）の南軍は、突如として明石城を攻撃した（「文化庁所蔵島津文書」『大日本史料6-4』777頁）。この明石城というのは、人丸山（現在の明石城の本丸附近）をさすものと考えられる。当時ここを守備していた島津忠兼（下揖保荘地頭）は応戦、撃退する。

翌27日、島津忠兼は、加爾坂（蟹坂＝和坂）の北方において、ふたたび南軍と戦っている（同書）。

南軍は、なぜ明石を攻撃目標にしたのであろうか。当地方には、山陽道という大動脈と明石津があり、ここを南軍に封鎖されるということは、守護赤松円心にとっては、黙視しがたい状況となる。

また戦場となった、加爾坂（現在の和坂1～3丁目）から南西1.5キロあまりのところに、松江という津があり、ここが経済的にも繁栄していたことは、貞治3年（1364）、福祥寺（神戸市須磨区須磨寺）住持の賢祐は、勸進如法経を、ここ松江でおこなっていることでも理解できる（「当山歴代」『兵庫県史史料編中世1』306頁）。

上記の相博以後、南軍の姿を明石地方にみることはなかった。

日本歴史学会会員 茨木 一成



和坂